

中日サロン 中嶋嶺雄氏の講演内容

十九日の中日サロン十一月例会で中嶋嶺雄東京外語大助教が行った「毛沢東死後の中国」と題する講演内容(要旨)は次の通り。

予測できた 四人組事件

最近の中国情勢は、流動が激しく非常に興味深い。米国のある学者が「中国においては、何が起ることも不思議ではない、と認識することが第一歩である」と述べているが、私も全くその通りだと思う。今回のような文革派四人組事件は、個々のプロットは予想できなかったが、そのドラマの大筋は予測できた。

は、左派の人たちがつくったものだと主張した。そのほか、例を挙げればキリがない。周恩来の遺書についても、四通あるといわれているが、人民日報が「走資派は周恩来の遺書をねつ造して、政治的に利用している」と、激しく攻撃したことは、記憶に新しい。

市の熟練工で一月九十元、普通の労働者は六十七元、農村では三十一・四十元(二元百五十円)。「敵しい」とみんな訴えていた。そして四月の天安門事件。記念碑に掲げられた毛沢東の写真と同じ位置に周恩来の写真を掲げ、百万民衆の間から国際労働歌である「インタナショナル」の歌声があがった。これまでは毛賛歌一色に塗りつぶされていたのだが、このこと一つをとっても、文革派の中に大きなキ裂ができて、党の分散現象が起っていることを示している。

毛沢東の死について、私はどうも二つのことを考えた。一つは「死ぬ時期が悪かった」ということであり、もう一つは「遺書を残したかどうか」ということである。遺書について、私なりの考えを述べてみる。

まず、中国を理解するには、当たり前前のことであるが、社会主義

毛沢東については、彼がエドガー・スノーやメキシコのエチエペリア大統領に「私は孤独である」と、本当に語ったとすれば遺書は残さなかったであろうし、その方が毛沢東らしい。しかし、彼の考え方は革命的なロマンチズムで貫かれている一方、エゴイズムでもあり、毛一族への配慮がなかったとはいえない。文革派の四人組は、自分たちが党から次第に孤立していることがわかってきたから、毛沢東のお墨付きが必要であったことは、容易に推察できる。

砕かれた毛 沢東の教え

さて、九月九日の毛沢東の死後、人民日報は紙面を黒ワクで囲み喪に服していたが、二十二日以降、普通の紙面に戻り、喪の明けたことを示した。が、すぐまた喪に服しており、政治的休戦を意味する喪の期間さえ定めえなかったことを暴露、すでに党内にかなりの角逐があったことをさらけ出している。

さらに河北の大地震。「人は天に勝つ」とし「深く地下道を掘り、広く食料を蓄え、覇権を求めず」とする毛沢東の教えは「ごく打ち砕かれ、「人は天に勝つ」ということが、目の前で証明された。

予想されたことではあったが、後継者問題も党の角逐も、なにも解決されない中で毛沢東は死んだ。時期が悪かった、といわざるを得ない。

最後に華国鋒体制の将来とその



中国には、脱文化大革命、の方向が底流にあることは否めない...と話す中嶋嶺雄氏(金沢スカイホテル)

進行していた党分裂

毛主席死ぬ時期が悪かった

義、あるいは共産主義体制の国であるといふことを念頭に置かなければならない。と同時に、中国の民族的、歴史的な特質を見逃してはいけない。

過去の歴史をみると、中国では偉大な指導者、リーダーが死んだとき、必ずといっていいほど遺書を巡ってトラブルが生じている。孫文が死んだとき、世界史の教科書にも載っているように「革命命いまだならず」との遺書を残したとされているが、これは病床でデッチ上げられたという説と▽新三民主義の立場からの遺書▽夫人にあてた遺書▽ソ連に残した遺書

この問題について考察を試みるには、一年前からの中国情勢を振り返ってみる必要がある。昨年の七月から八月をピークに、いわゆる杭州事件が起こったが、これは純粋な反権力闘争ではなく労働者が賃上げを求めてストを打った、ということに重要な意味がある。毛沢東、文革派にとって最も肝心の労働者が反旗を翻したのである。貧困のユートピアを求める毛沢東路線を批判したもので、このころ、鄧小平ら走資派の「階級闘争、継続革命を主張するだけではダメだ。工農、国防、科学技術の進歩の中で近代化を打ち出さなければいけない」とする考え方が、中国全土にフワッと伝わった。

華国鋒の生いたちはわからない部分が多く、特に一九三〇年代まではわかっていない。知られたくない事情があるのだろう。今、盛んにイメージづくりが行われているが、彼を評する「農民のような節くれだった手」というのは虚像で、特務、公安関係を長く歩んできた。毛沢東の故郷、湖南省湘潭地区の党の書記(統一戦線工作部を二十年間も務めており、予防クーデターを暗示するような経歴があった。なぜ、一介の地区の書記が毛沢東の後継者になり得たか

の三つがあったとの説があり、当時、国民党右派の人たち

昨年一月、中国を真側から見ると、ソ連、モンゴル、北京を旅したが、中国の経済水準は文革の激動期に比べると、歴然と高くなっている。みんな「金が欲しい」と訴えていたが、賃金は一九六三年から凍結されたまま。都

今の中国は、スターリン死後のソ連によく似ている。脱文革、周恩来、鄧小平路線を継ぐ集団に対し、毛沢東を絶対視する拒否集団があることも事実で、華国鋒体制は、まだ一波乱も二波乱もあることが予想される。

林彪は墜落死せず

中国問題の第一人者といわれる中嶋氏の講演内容は明快なもの。参加者の一人が、さる四十六年九月十二日、飛行機で中国から逃げ出す途中、モンゴルで墜落死したといわれる林彪元中国共産党副主席の「ナゾ」をたどった。これに対し「昨年、私もモンゴルに行った時、研究者として興味があるので聞いたところ、飛行機はまだそのままにしているが、林彪らしい人物は乗って

いなかったという。中国がくり上げたシナリオだけが伝えられているが、モンゴルのいうことが正しいと思う」とスバリ返答。参会者はみんな「ホウ」といった表情で、竹のカーテンのお国柄に改めて驚いていた。

「路線的には走資派と批判されている鄧小平が正しかったというわけであり、中国人民の間には、そんな考え方が定着していると思う」とことを挙げた。さらに「反党四人組の上海グループと李先念らの黄安グループの対立が今度の政変であるが、華国鋒は黄安グループとも違つたので、もう一波乱あるかもしれないというのが私の見方だ」と、中国の政情不安定を予測。参会者は難解な中国問題を掘り下げて聴かされ「いい勉強になった」と異口同音。